九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

発達の偏りを有する子どもをもつ母親の育児自己効力感にソーシャルサポートが及ぼす影響

丸山，沙紀
九州大学大学院人間環境学府

遠矢，浩一
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/1911193

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 7, pp.17-26, 2016-01-20. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

Bulletin of Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University
Vol. 7, pp. 17−26.

発達の偏りを有する子どもをもつ母親の育児自己効力感にソーシャルサポートが及ぼす影響

丸山沙紀　九州大学大学院人間環境学府　／遠矢浩一　九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本研究では，発達の偏りを有する子どもをもつ母親を対象に，育児自己効力感と夫や友人，療育機関によるソーシャルサポートの関連を検討した。母親には質問紙調査法を実施した。その結果，友人からの情緒的サポートを多く得ている母親は，そうでない母親と比較して子どもに積極的に関わったり，子どもを安心させたりする効力感が高い傾向にあること，夫からも友人からも情報的サポートが得られにくい母親は子どもに積極的に関わることに対する効力感が持ちづらいことが示された。また，療育機関によるソーシャルサポートの量と育児自己効力感には関連が見られなかった。今後は，育児自己効力感尺度の再検討および療育機関によるソーシャルサポートについて，母親のニーズに沿ったサポート内容を踏まえて，サポートの質に着目したより詳細な検討が課題として残された。

キーワード：発達障がい，母親，育児自己効力感

Ⅰ　問題と目的

発達障がい児をもつ母親の中には，我が子の発達障がい特有の行動特徴をどのように理解して接すればよいのかについて難しさを感じている母親が少なくない（種子田ら，2004など）。また，周囲の人々に我が子についての理解を求めるとき，どのように周囲の人々に対応していいかと戸惑い，周囲の人々から分かってもらえる体験の少なさから，孤立して悩んでいる母親の存在も指摘されている（遠矢・針塚，2006など）。このように，発達障がい児をもつ母親は，育児において困り感を抱きやすい可能性が高いと考えられる。

ここで，育児における難しさを乗り越えていくためには，社会的資源と個人的資源についての見通しが重要であり，個人的資源の１つに自己効力感が挙げられる（渡辺・石井，2009）。近年，自己効力感の概念は育児の領域に適応され，育児自己効力感として注目されている。育児自己効力感とは，「育児役割において上手くやっていくことが出来るという，親としての能力に対する自信」のことを指す（田坂，2003）。これまで，育児自己効力感に関する先行研究はあまり見受けられないものの，育児自己効力感が，育児に対する個人的な満足感や適応，そして親が子どもに与えることのできる心理的または物理的環境の質を理解するための変数として重要であることが明らかにされている（田坂，2003；金城，2013）。つまり，育児自己効力感は，育児に関する達成能力を左右し，その結果，子どもの行動と発達に影響を与えるものであると考えられる（田坂，2003；金城，2013）。

また，社会的資源にはソーシャルサポートが挙げられる。具・松尾（2005）は，障がいのある子どもをもつ親のソーシャルサポートの機能を考える際には，どのようなサポート源から，どのような種類のサポートを受けているかに着目する必要があると述べている。サポート源について，先行研究では，家族や友人，療育機関をサポート源とした研究が多く見られる（北川ら，1995など）。サポートの種類については，「支持」と「情報提供」といった情緒的・情報的サポートが重要であると指摘されている（岩崎・海蔵寺，2007）。したがっ

て，本研究では，母親のソーシャルサポートについて，サポート源に夫，友人，療育機関を，サポートの種類に情緒的サポートと情報的サポートを取り上げて研究を行うこととする。

以上のように，育児自己効力感やソーシャルサポートの重要性は多く論じられてきたが，双方の関連性に着目した研究は少なく，特に，育児自己効力感に関して発達障がい児をもつ母親に焦点が当てられた研究は見られない。

以上を踏まえて，本研究では，発達障がいや，発達の偏りを有するためにそうした特性を示す子どもをもつ母親の育児自己効力感にソーシャルサポートが及ぼす影響を検討することを目的とする。そうすることにより，母親の育児自己効力感を高めるために支援者に求められることを検討し，発達障がい児をもつ母親の子育て支援の一助とする。

Ⅱ．方法

調査対象：Z大学Yセンターにおいて，筆者らの実施する集団活動を通じた対人関係スキルの発達支援プログラムであるグループセラピーに参加している子どもの母親38名

調査時期：X年11月下旬～X年12月上旬

調査手続き：質問紙調査法を実施した。グループセラピーの親の会にて，「子どもに対する子育ての在り方とそれに関する事柄について教えて頂きたいこと」，「得られた回答は，筆者が責任を持って管理し，研究以外の目的で使用することはないこと」といった調査の主旨について説明し，回答は任意であることを伝えた上で，母親に質問紙を配布，回収した。回収については，親の会を介して受け取るか，郵便による返送にて行った。

質問紙の構成：

①フェイスシート

母親の子どもについて，性別，年齢，学年，診断名の有無を，母親について，年齢の回答を求めた。

②育児自己効力感尺度

金城（2013）の育児自己効力感尺度をもとに，筆者が表現を加筆修正し，14の質問項目を作成した。この項目は「子どもへの積極的関わりの自信」，「子どもを安堵させる自信」，「子どもを自己統制させる自信」の3因子から構成されている。また，育児を1つの領域とみなしてその領域における自己効力感を測定するParental Self-Agency Measure（PSAM：Dumka et al., 1996）との妥当性，信頼性が確認されている（田坂，2003）。各質問項目に母親がどれぐらい当てはまるか，4件法（1：当てはまらない～4：当てはまる）で回答を求めた。

③ソーシャルサポート尺度

a）夫によるソーシャルサポート

内野（2006），村松（2006）で用いられたソーシャルサポート尺度の因子分析およびI-T相関分析における因子負荷量が.6以上の「情緒的サポート」と「情報的サポート」因子に含まれていた項目を中心に取り上げ，筆者が加筆修正，追加して13の質問項目を作成した。各質問項目のサポート内容を母親が夫からどれぐらい受けているか，4件法（1：当てはまらない～4：当てはまる）で回答を求めた。

b）友人によるソーシャルサポート

「a）夫によるソーシャルサポート」で作成した尺度と同じものを使用した。教示文を「夫」から「友人」に文言を変えて，各質問項目のサポート内容を母親が友人からどれぐらい受けているか，4件法（1：当てはまらない～4：当てはまる）で回答を求めた。なお，回答してもらう際には，母親が最も多くのサポートを受けていると感じる友人を1人思い出して回答してもらうように教示

した。

c）療育機関によるソーシャルサポート

野田（2010）の家族支援尺度を参考に，筆者が表現を加筆修正し，16の質問項目を作成した。野田（2010）は，広汎性発達障がい児の家族に対する専門機関からの支援内容を，支援者側の立場から「主体的対応力の支持」，「子どもに関する情報提供」，「家族の困難受容」，「日常の対応方法に関する情報提供」，「支援者による連携」の５因子に分類している。本研究では，上記５因子のうち，母親に関係するものとして「主体的対応力の支持」，「子どもに関する情報提供」，「家族の困難受容」，「日常の対応方法に関する情報提供」の４因子を採用した。また，この家族支援尺度は，十分な内的一貫性が見られ，信頼性が確認されている（野田，2010）。各質問項目のサポート内容を母親が療育機関からどれぐらい受けているか，４件法（１：当てはまらない～４：当てはまる）で回答を求めた。なお，回答してもらう際には，母親が最も多くのサポートを受けていると感じる療育機関を１つ思い出して回答してもらうように教示した。

Ⅲ．結果と考察

有効回答者数は欠損値の多い回答を除いた25名で，質問紙の回収率は65.8％であった。

対象となった母親の平均年齢は，44.29歳（*SD* = 5.07）であった。

母親の子どもは，男児20名，女児５名で，平均年齢は12.4歳（*SD* = 2.2）であった。医学的診断（ASD，ADHDなど）を受けている子どもは17名，未通院のため診断を受けていない子どもは８名であった。未診断の子どもは，Z大学来談時のアセスメントまたは他機関での教育相談において，発達の偏りを有していることが示されており，グループセラピーへの参加に至っていた。

分析にはSPSS21.0Jが用いられた。

尺度の検討

本研究で使用した尺度は，先行研究で既に因子構造が検討されていた。よって本研究では，先行研究の因子構造に則り，信頼性だけを検討することとした。信頼性について，内的一貫性を検討するために，因子ごともしくは尺度ごとに信頼性分析を行い，信頼性係数である*Cronbach*のα係数を算出した。各尺度の逆転項目については，全て回答を逆転処理した。ただし，今後は対象者を更に増やして，各尺度の妥当性と信頼性について検討する必要がある。

信頼性分析の結果，育児自己効力感尺度について，本研究では「子どもへの積極的関わりの自信」（α = .86）と「子どもを安堵させる自信」（α = .83）で，十分な信頼性が確認された。しかし，「子どもに自己統制させる自信」（α = .41）は，十分な信頼性が確認されなかった。したがって，以下の分析では扱わずに，２因子構成とした。（Table.1）

これは，先行研究で挙げられた３因子構成とは異なる結果となった。その理由として，本研究で用いた育児自己効力感尺度は，田坂（2003）により信頼性や妥当性が確認されたものであったが，田坂（2003）が対象としていたのは幼児をもつ母親だったため，本研究で対象となった母親の子どもの年齢と差があったことが挙げられる。今回不採用となった「子どもに自己統制させる自信」に含まれている項目には「どうしても言うことを聞かない」，「聞き分けのない」などといった表現がなされており，このような表現が，本研究で対象となった子どもをもつ母親には，現在の子どもの様子に対して不適切な印象を与えてしまった可能性がある。また，田坂（2003）の研究でも，「子どもに自己統制させる自信」のα係数はα = .58であり，他の因子に比べて信頼性が低くなっていた。このような元々の信頼性の低さに加え，対象となった子どもの年齢に差が見られたことが今回の因子の構成に影響したと考えられる。

夫，友人によるソーシャルサポート尺度について，「情緒的サポート」（夫：α = .91，友人：α = .98）と「情報的サポート」（夫：α = .91，友人：α = .98）で，十分な信頼性が確認された。（Table.2）

療育機関によるソーシャルサポート尺度について，「主体的対応力の支持」（α = .84），「子どもに関する情報提供」（α = .82），「家族の困難受容」（α = .81），「日常の対応方法に関する情報提供」

Table.1　育児自己効力感尺度についての信頼性分析の結果

育児自己効力感尺度（α = .89）
第1因子：子どもへの積極的関わりの自信　（α = .86）
1．子どもとしっかり遊んだり，あるいは話をしたりする中で，子どもの気持ちを満足させている。
3．子どもに合ったいろいろな遊び方で関わっている。
5．忙しいときでも子どもと関わることができる。
8．子どもは，あなたをよく遊んでくれる遊び相手あるいは良き理解者だと思っている。
10．子どもがまねのできるような良いお手本を見せている。
11．子どもの行動や表情には敏感に反応している。
第2因子：子どもを安堵させる自信　（α = .83）
2．子どもが自信がつくように良い所はほめている。
6．子どもがぐずったとき，あるいは言うことを聞かないときになだめている。
9．子どもが不安そうにしているとき，言葉をかけて安心させている。
12．子どもの機嫌が悪いときにも落ち着いて話をしている。
13．子どもが泣き出したとき，私が関わることで泣き止む。

除外項目
4．子どもに我慢させるべきことは我慢させられる。
7．子どもがどうしても言うことを聞かないときには，子どもの要求通りにしてしまう。(R)
14．子どもが聞き分けのないときには，何を言っても無駄だと思う。(R)
＊（R）は逆転項目を示す。

Table.2　夫，友人によるソーシャルサポート尺度についての信頼性分析の結果

夫，友人によるソーシャルサポート尺度　（夫：α = .91，友人：α = .98）
第1因子：情緒的サポート　（夫：α = .91，友人：α = .98）
1．私の個人的な悩みや心配事を聞いてくれる。
2．私が落ち込んでいると慰めてくれる。
3．「お疲れ様」と労ってくれる。
4．「あまり無理をしないで頑張って」と励ましてくれる。
5．私の立場や辛さをよく理解してくれる。
6．私に何か嬉しいことが起きたとき，それを我が事のように喜んでくれる。
7．私が何かを成し遂げると心から「おめでとう」と祝福してくれる。
8．「あなたのやり方で良いのだ」と，日頃から私の実力を評価し，認めてくれる。
9．良いところも悪いところも全て含めて，あなたの存在を認めてくれる。
10．私が気付かなかった子どもの長所や能力を指摘してくれる。
第2因子：情報的サポート　（夫：α = .91，友人：α = .98）
11．子どもの障がいや発達について知りたいとき，必要な情報を与えてくれる。
12．子どもの療育や進学先など大事なことを決めるとき，有効なアドバイスをしてくれる。
13．私の求めている情報がどこで得られるのか教えてくれる。

Table.3　療育機関によるソーシャルサポート尺度についての信頼性分析の結果

療育機関によるソーシャルサポート尺度（α = .93）
第１因子：主体的対応力の支持　（α = .84）
１．子どもとの関わりの中で，家族がどのような工夫をしているのかについて話を聞いてくれる。
５．子どもの対応に関する家族の工夫を認めてくれる。
９．具体的にどのように対応していけばよいかを一緒に考えてくれる。
14．子どもが通っている他の機関で起きている問題の相談に乗ってくれる。
15．家族が行っている生活の中の一見何気なく思われるような小さな努力でも，言葉にして労ってくれる。
16．日々の生活の中で，子どもと家族が直面している問題にどのように対応するか一緒に考えてくれる。
第２因子：子どもに関する情報提供　（α = .82）
４．同じ年齢の子どもの発達の道筋を伝えた上で，これからの可能性を伝えてくれる。
８．家族が気が付いていない，子どもについての新しい視点を提供してくれる。
12．子どもの障がいや難しさについて子ども一人一人に合った説明をしてくれる。
13．様々な検査の結果と内容について，家族が分かる言葉で伝えてくれる。
第３因子：家族の困難受容　（α = .81）
３．話の中から，子どもが困っていることを汲み取ってくれる。
７．家族自身が抱えている困難について話を聞いてくれる。
11．家族全員の困っていることを聞いてくれる。
第４因子：日常の対応方法に関する情報提供　（α = .89）
２．家族が日常生活の中でできる対応を伝えてくれる。
６．子どもの得意なことを，生活にどのように活かすかについて伝えてくれる。
10．子どもの関心事を親子の遊びや子どもの一人遊びにどのように活かすかについて伝えてくれる。

（α = .89）全ての因子で，十分な信頼性が確認された。（Table.3）

夫，友人による情緒的サポートの量が育児自己効力感に及ぼす影響

まず，夫，友人による「情緒的サポート」について，それぞれ下位尺度得点の平均値以上を『情緒的サポート高群（以下Ｈ群）』，平均値以下を『情緒的サポート低群（以下Ｌ群）』と群分けした。

次に，夫による情緒的サポート量と友人による情緒的サポート量を独立変数，育児自己効力感尺度の下位尺度得点を従属変数とする２×２の被験者間２要因分散分析を行った。（Table.4）

その結果，「子どもへの積極的関わりの自信」について，友人による情緒的サポートの主効果に有意傾向が示された（F（1,21）= 4.00, p < .10）。得点はＨ群2.92，Ｌ群2.46であり，友人から情緒的サポートを多く受けている母親のほうが，そうでない母親に比べて，子どもへの積極的関わりの自信が高い傾向にあった（Figure.1）。

また，「子どもを安堵させる自信」についても，友人による情緒的サポートの主効果に有意傾向が示された（F（1,21）= 3.96, p < .10）。得点はＨ群3.23，Ｌ群2.78であり，友人から情緒的サポートを多く受けている母親のほうが，そうでない母親

Table.4　夫，友人からの情緒的サポートH/Lによる育児自己効力感尺度の下位尺度得点と分散分析結果

夫 H/L	夫Ｈ		夫Ｌ		主効果		交互作用
友人 H/L	友人Ｈ	友人Ｌ	友人Ｈ	友人Ｌ	夫	友人	
子どもへの積極的関わりの自信	6	6	8	5	.15	4.00^{+}	.03
	2.94	2.53	2.90	2.40			
	.34	.57	.50	.81			
子どもを安堵させる自信	6	6	8	5	1.65	3.96^{+}	.13
	3.33	2.97	3.13	2.60			
	.33	.53	.51	.81			

上段：人数，中段：平均値，下段：標準偏差

$^{+}$ = p < .10

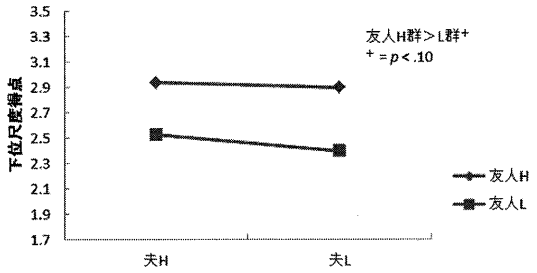

Figure.1　夫と友人からの情緒的サポートH/Lによる子どもへの積極的関わりの自信の違い

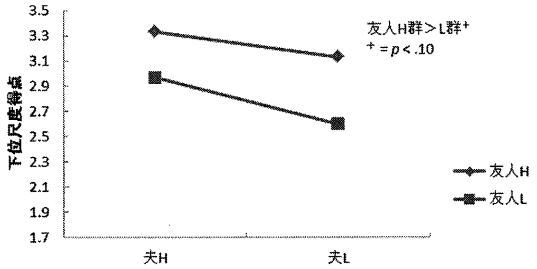

Figure.2　夫と友人からの情緒的サポートH/Lによる子どもを安堵させる自信の違い

に比べて，子どもを安堵させる自信が高い傾向にあった（Figure.2）。

夫による情緒的サポートの主効果および交互作用は，どちらの因子についても有意差は見られなかった。

このことから，夫による情緒的サポート量の多少にかかわらず，友人から情緒的サポートを多く受けている母親のほうが，そうでない母親よりも子どもに積極的に関わったり，子どもを安心させたりすることに対する効力感を持ちやすい可能性が示された。太田（2010）は，母親が子どもを産んだ立場から子どもの障がいの原因を自らに起因して，子どもに対する責任を背負いがちな傾向にあることや夫婦間の障がいに対する認識の違いにより，家族からのサポートは個人差が大きいことを指摘している。一方で，友人，とりわけ障がいをもつ子どもを育てる母親の友人からのサポートは，家族からのサポートと比較して高く認識されていること（太田，2010）や，子育てにおいて最も有用である（石本・太井, 2008），助けになる（湯沢ら，2007）と認知されていることが報告されている。発達障がい児をもつ母親は，そういった友人について，お互いに同じ悩みや経験を持っていることで，障がいに関する情報を得られ，不安な気持ちを話し合える相手として，具体的な情報的側面および安心感と育児の楽しみを与える情緒的側面の2側面で重要なサポート源だと捉えている（具・松尾，2005）。中でも，情緒的サポートに関しては，互いの境遇について相互に共感し合ったり，励まし合ったりといった交流も起こりやすいと考えられる。そのような相互の交流の中で，母親は不安を緩和したり，自身のおかれた境遇について受容された体験を得たりして，少しずつ自信を持って子どもに関わっていくものと考えられる。したがって，友人から情緒的サポートを多く得ることが，自分の不安を軽減させ，結果的に子どもに積極的に関わったり，子どもを安心させたりすることに対する効力感を高めるのに影響を及ぼす可能性があると考えられる。

夫，友人による情報的サポートの量が育児自己効力感に及ぼす影響

まず，夫，友人による「情報的サポート」について，それぞれ下位尺度得点の平均値以上を『情報的サポート高群（以下H群）』，平均値以下を『情報的サポート低群（以下L群）』と群分けした。

次に，夫による情報的サポート量と友人による情報的サポート量を独立変数，育児自己効力感尺度の下位尺度得点を従属変数とする2×2の被験者間2要因分散分析を行った。（Table.5）

その結果，「子どもへの積極的関わりの自信」について，夫による情報的サポートの主効果に有意傾向が示された（F（1,21）= 3.30, p < .10）。さらに，交互作用に有意傾向が示された（F（1,21）= 3.97, p < .10）。単純主効果の検定を行ったところ，夫による情報的サポートL群において，友人による情報的サポートL群は，H群よりも子どもへの積極的関わりの自信が有意に低く（F（1,21）= 6.74, p < .05），友人による情報的サポートL群

Table.5　夫，友人からの情報的サポートH/Lによる育児自己効力感尺度の下位尺度得点と分散分析結果

夫H/L	夫H		夫L		主効果		交互作用
友人H/L	友人H	友人L	友人H	友人L	夫	友人	
子どもへの積極的関わりの自信	3 2.78 .69	6 2.94 .42	12 2.82 .47	4 2.04 .69	3.30+	1.66	3.97+
子どもを安堵させる自信	3 3.13 .83	6 3.17 .51	12 3.13 .45	4 2.45 .70	2.04	1.68	2.04

上段：人数，中段：平均値，下段：標準偏差
$^{+} = p < .10$

において，夫による情報的サポートL群は，H群よりも子どもへの積極的関わりの自信が有意に低かった（F (1,25) = 7.39, $p < .05$）（Figure.3）。

「子どもを安堵させる自信」については，夫，友人による情報的サポート量の主効果および交互作用に有意差は見られなかった（Figure.4）。

このことから，夫からも友人からも情報的サポートが得られにくい母親は，子どもへ積極的に関わることに対する自信が持ちづらいことが示された。一方で，子どもを安心させることへの自信には，母親が夫や友人からどれだけ情報的サポートを得ているかということとは関連がないことが示された。情報的サポートとは，質問紙の内容から，子どもの障がいや発達に関する情報を与えてもらうこと，療育や進学先など重要な決断をする際に有効な助言をもらうこと，自分が知りたい情報の提供先を教えてくれることを指すものであった。これらのサポートが夫からも友人からも得られにくいということは，つまり，母親は子どもの特性に関する情報を十分に把握しにくい，もしくは他者と共有出来にくい中で，子どもに関する重要なことについて自分１人で決断していかなくてはならない状況になりやすいと考えられる。よって，このような状況に置かれることが，母親にとって「子どもへの積極的関わりの自信」に含まれる子どもに合わせて遊ぶことや良いお手本になること，良き理解者となって子どもを満足させることなど，より子どもの特性に沿った具体的関わりに関する効力感を持ちづらくさせてしまうことに繋がっていると考えられる。

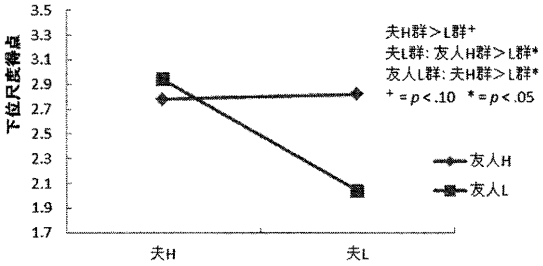

Figure.3　夫と友人からの情報的サポートH/Lによる子どもへの積極的関わりの自信の違い

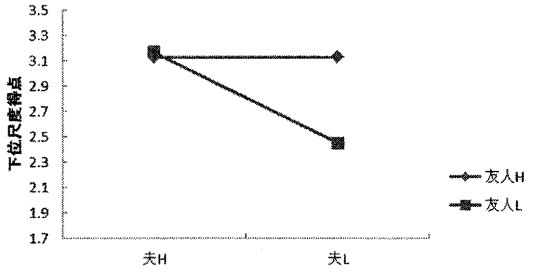

Figure.4　夫と友人からの情報的サポートH/Lによる子どもを安堵させる自信の違い

一方，「子どもを安堵させる自信」は，子どもの特性に沿った具体的関わりというよりも，子どもに安心感を与えるという発達のより基盤となる情緒的関わりが強く求められるため，夫や友人による情報的サポートとの関連に有意差が見られなかったと考えられる。

療育機関によるソーシャルサポート量が育児自己効力感に及ぼす影響

療育機関によるソーシャルサポート量と育児自

己効力感に関連が見られるか検討するため，Pearsonの積率相関分析を行った。その結果，どの下位尺度得点においても，両者の間に有意差は見られなかった（Table.6）。

このことから，療育機関によるソーシャルサポートの量と育児自己効力感の間には関連がないことが示された。つまり，療育機関によるサポートは多く得ていると評価しているが，育児自己効力感は低い母親の存在や，反対に療育機関によるサポート量は少ないが，育児自己効力感は高い母親の存在があることが示された。これより，母親の育児自己効力感に対して，療育機関によるサポートは，その量よりも質が重要視されている可能性が示唆される。北川ら（1995）は，ソーシャルサポートと精神的健康に着目した研究ではあるが，障がい児をもつ母親の場合，サポートを単に量的に捉えただけでは精神的健康を説明し尽くすことは出来ないとして，母親がサポート源ごとに違った意味付けをしていることを示唆している。これを踏まえると，療育機関は，夫や友人など母親の身近に存在するサポート源とは異なり，母親自身がより主体的に関わろうとしない限り，そこからのサポートを得ることは難しいサポート源である。言い換えると，母親が療育機関を求めた場合は，その分，子どもに関する悩みや関わりの難しさも多いことが推察される。また，母親が求めるニーズは多く，それらが子どもの特性と関連していることも報告されている（呉ら，2006）。それに対して，専門機関は質の高い的確なサポートを提供することの重要性が述べられており（石本・太井，2008），本研究に於いても，どのようなサポートを母親が求めているのか，母親のニーズを反映させながら研究を進める必要があった。また，今回の尺度では，療育機関によるサポートの内容を捉えることに留まっていた。しかし，実際の臨床場面においては，面接の中で，面接者がその内容に関して具体的にどう関わったのか，関わりの在り様によって母親が捉える印象は異なるのではないかと考えられる。したがって，今後はより実際の臨床場面に近い条件を設定して，療育機関によるソーシャルサポートの関連と育児自己効力感の関連について，詳細に検討する必要がある。

Ⅳ．まとめと今後の課題

本研究では，発達の偏りを有する子どもをもつ母親を対象に，育児自己効力感とソーシャルサポートの関連を検討することを目的として，質問紙調査を行った。

その結果，夫や友人によるソーシャルサポートとの関連が一部見られ，友人からの情緒的サポートを多く得ている母親は，子どもへの積極的関わりの自信や子どもを安堵させる自信が高い傾向にあること，夫からも友人からも情報的サポートが得られにくい母親は，子どもへの積極的関わりの自信が低いことが示された。一方で，療育機関によるソーシャルサポートの量と育児自己効力感には関連が見られなかった。このことから，サポート量が多ければ育児自己効力感が高いとは一概に言うことは出来ず，育児自己効力感を高めるために母親が各サポート源に求める役割やサポートの内容，サポートの提供のされ方などはそれぞれによって異なる可能性が示唆された。

今後は，先行研究と構成が異なる結果となった育児自己効力感尺度の再検討および療育機関によ

Table.6　育児自己効力感と療育機関によるソーシャルサポートの相関

	子どもへの積極的関わりの自信 (N = 25)	子どもを安堵させる自信 (N = 25)
主体的対応力の支持	.06	− .01
子どもに関する情報提供	.16	.07
家族の困難受容	− .03	.16
日常の対応方法に関する情報提供	.06	− .01

るソーシャルサポートについて，母親のニーズを踏まえたサポート内容を考慮に含めた上で，サポートの質に着目したより詳細な検討を行う必要がある。

謝辞

本研究の実施にあたり，快くご協力頂きましたお母様方に心より感謝申し上げます。

引用文献

Dumka, L. E., Stoerzinger, H. D., Jackson,K.M, & Roosa, M. W. (1996). Examination of the cross-cultural and cross-language equivalence of the Parenting Self-Ageny Measure. Family Relations 45, 216-222

具建希・松尾直博（2005）．障害のある子どもをもつ母親ストレスとサポートについて　東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要 1，33-47

石本雄真・太井裕子（2008）．障害児をもつ母親の障害受容に関連する要因の検討　―母親からの認知，母親の経験を中心として―　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 1（2），29-35

岩崎久志・海蔵寺陽子（2007）．軽度発達障害児をもつ親への支援 流通科学大学論集 人間・社会・自然編 20（1），61-73

金城志麻（2013）．自閉症児を育てる母親の「子ども理解」と育児効力感の関連　琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要（4），15-21

北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男（1995）．障害幼児を育てる母親へのソーシャル・サポートの影響 特殊教育学研究 33（1），35-44

村松十和（2006）．育児中の母親の心理（衝動的感情と育児不安）と夫との関係に関する研究 三重看護学誌 8，11-20

野田香織（2010）．広汎性発達障害児の家族支援―専門家の支援内容に関する調査研究　臨床心理学 10（1），63-75

太田顕子（2010）．発達障害のある幼児児童を育てる母親のソーシャルサポートに対する認識―家族,仲間及び専門機関からの支援に注目して― 幼年児童教育研究（22），35-44

呉栽喜・岡田節子・朴千萬［他］・中嶋和夫（2006）．障害幼児の発達特性と母親のニーズの関係　大東文化大学紀要 社会科学・自然科学 44（社会科学），15-22

種子田綾・桐野匡史・矢嶋裕樹・中嶋和夫（2004）．障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係 東京保健科学学会誌 7（2），79-87

田坂一子（2003）．育児自己効力感（parenting self-efficacy）尺度の作成　甲南女子大学大学院論集 人間科学研究編 創刊号，1-10

遠矢浩一［編著］・針塚進［監修］（2006）．軽度発達障害児のためのグループセラピー　ナカニシヤ出版

内野里美（2006）．障がいのある子どもの両親に対するソーシャル・サポート　―夫婦間サポートと養育ストレスに及ぼす影響―　家族心理学研究 20（1），39-52

渡辺弥生・石井睦子（2009）．乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について　法政大学文学部紀要（60），133-145

湯沢純子・渡邊佳明・松永しのぶ（2007）．自閉症児を育てる母親の子育てに対する気持ちとソーシャルサポートとの関連　昭和女子大学生活心理研究所紀要 10，119-129

Effects of social support on mother's self-efficacy for the parenting to the children with developmental difficulties

Saki MARUYAMA
Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
Koichi TOYA
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this study is to examine the relatedness between self-efficacy of parenting for the children with developmental difficulties and social support by her husband, friends and the professionals, by means of a series of questionnaire.

As a result, it was indicated that the mothers who were much supported emotionally by their friends, in comparison with the others, tended to have high level of self-efficacy to interact with their own children actively or to let their children feel safety in daily life. Also it was indicated that the mothers who were difficult to obtain informational support from her husband and friends showed less self-efficacy to interact with the children actively. On the other hand, the amount of social support by the professionals wasn't relating to the self-efficacy of parenting.

The effective quality and quantity of social support for the mothers of children with developmental difficulties were discussed.

Keywords: developmental disability, Mother, parenting self-efficacy